【後日談】Ep02：食卓にて――美味礼讃

（※こちらは『【後日談】Ep01：牢獄にて――胡蝶之夢』のイフ版続編となっておりますので、先にそちらをお読みになってからご覧ください！またこちらは本編おまけトラックの『アリシアちゃんBad End！』と同じ軸のお話で、とっても頭のゆる～いゆる百合路線となっておりますので、シリアス路線をお求めの場合はお読みにならない方が良いかもしれません……！）

『――そして次に目覚めた私は、自身の胎内に新たな生命が宿っていることに気づき、ついに母となる喜びをかみしめるのだった。』……完」

むぐむぐと白米を噛みしめながら、わけのわからないことを滔々と淀みなくまくしたてる、目の前の生物。

「やっぱり異種姦でさらに監禁・凌辱ときたら、次は孕ませ・腹ボテルートがお約束ですよねぇ～！ということで、今夜は受胎・産卵アクメのシチュエーションでいきましょうよぉ！……あ、ご飯おかわりお願いしますぅ～！もちろん大盛で！このおっぱいを維持するためにも、莫大なカロリーが必要なんですよねぇ～！」

ずずいっと、目の前に空になった茶碗を差し出してくるのは、先日突然私の前に現れて好き放題してくれた謎の生物。淫魔とかのたまう、ちょっとアレなイキモノ。

……なんでこの淫魔、ウチで私と食卓囲んじゃってるんでしょうね。

「えー？またまたぁ！そんなこと言いつつも、こうして訪ねてくるたびに私に美味しいお食事用意してくれちゃうお姉さんってば……。んもう……、いっそ私たち、結婚しちゃいますぅ？」

そういってジリジリとにじり寄ってくる、この能天気おバカ娘の尻尾を遠慮なくつかんで引っ張り上げれば、ぎゃふん、とみじめな声を上げて脱力し、食卓に突っ伏した。

……まあ、結局私も、この無駄に性技だけ優秀で、頭ユルユル（それ以外も色々ユルユルだけど）の淫魔に絆されちゃってるのかもしれないんだけど……。

……ん？それって色々問題あったりするのでは……？

「はいはーい！お姉さんったらぁ、アリシアちゃんが目の前にいるのにぃ、自分の世界に浸らないでくださいね～！構ってくれなきゃ嫌ですよぉ～？」

人が物思いにふけっていれば、クネクネ身をよじりながらわざとらしい猫なで声ですり寄ってくる淫魔。

はぁ……とひとつため息をついて、脇によけていたお盆で一発、そのネジが数本飛んでそうなおつむをはたいてやれば、スコーンと小気味いい音が響く。

……脳みそ絶対空っぽだわ、この生き物。

ある意味感心しながらそのおつむを眺めていれば、暴力反対ーだの、DVーだの、ご近所さんから誤解を受けそうな事をわざとらしく叫ぶので、その無駄によく回る口に、我ながらよくできたと納得のだし巻き卵を一切れ突っ込んでやった。

反射のようにもぐもぐ動く真っ赤な唇が、次第にほにゃん、ととろけていく。

「んー、このだし巻き卵ってやつ？これ、おいしーですよねぇ！ジャパニーズ・ソウルフードってやつですかぁ？」

うんうんと一人で頷きながら、もう一切れ……とちゃっかり箸を伸ばしてくる淫魔。ジャパニーズも何も、あんた人間ですらないでしょ……と呆れつつも、自信作を褒められて悪い気はしない。

意外と上手に箸を使う目の前の生物を眺めていれば、二切れ目もしっかり堪能し、ずずっとお味噌汁をすすってさらに良い笑顔を浮かべる。

……ほんと何なの、このイキモノ。

「でもでもぉ……、アリシアちゃんとしてはぁ……。やっぱりお姉さんの甘ぁい精気が一番、好ましかったりするのでぇ……」

突然近くで聞こえた囁き声に正気に戻れば、さっきまで向かいにいたはずの淫魔がいつの間にかべっ

たりと隣に侍り、しなだれかかっていた。

「んふふっ！今夜もたっぷり、気持ちのいーい悪夢をご馳走しちゃいますよぉ？」

そう言って覆いかぶさってくる。

食欲の次はやっぱり性欲ですか、そーですか。

呆れてジト目で見上げても、相手は当然どこ吹く風。

宥めるようにそっと、その細い指先で頬に触れてくるこの淫魔を、結局こうして拒み切れずに受け入れてしまう自分にも呆れつつ、迫ってくる柔らかで甘い唇に、せめてもの意趣返しとばかりにこちらからかぶりついてやれば。

驚いたのかまん丸に開いた大きな瞳が、次第ににんまりと弓のような弧を描き、遠慮も躊躇いもなくこちらの唇の中にその真っ赤な舌先をにゅるんと忍び込ませてきて。

「……大丈夫ですよぉ？アリシアちゃんにぜーんぶお任せ、しちゃってくださいねぇ？」

さんざん人の口内をねっとりとしゃぶりつくした後、唾液に光るその唇を耳元に押し付けて、そう囁いた。

……あーあ。結局今夜も私の穏やかな眠りは、こうして目の前のお馬鹿で自己中でエロエロな悪魔に、嬉々として奪われてしまうのだ。

その場で押し倒してこようとするおバカにデコピンを一発。調子に乗るなとため息をつきながら、その無駄に立派な頭の角をひっぱって縋りつく腕を引きはがす。
まずは食事をきちんと終わらせて、後片付けとお風呂、それが終わってからだと告げれば、目に見えて表情が生き生きと輝いて、山と盛られたご飯を掻っ込み始めた。

……あーあ、まったく。

まさか『コレ』をちょっと可愛いと思えるようになるなんて。
私の人生、これからどうなっちゃうのかしら……と、目の前の謎の生物を眺めてため息をつきながらも、唇の端が緩んでしまっていることも自覚済みだ。
まぁ、なんだかんだ情が湧いちゃったんだから、しょうがないよね。
一度飼ったものは、最後まで面倒みなきゃ。

……って、いつの間にやらペット感覚になっていたことに、今さらながらちょっと愕然としつつ、私も食事を再開する。
どうせ今夜もネチネチしつこく迫ってくるんだろうし、こっちも体力つけとかなきゃ……ね！
……それが実はかなり気持ち良かったりすることについて、目の前の生物にだけは内緒にしとかなきゃ、だけど。

すさまじい勢いで消えていくおかずを慌ててキープして、今夜の闘いに備えるべく、私もせっせと箸を動かした。

後日談Ep02：End